

前期日程

令和4年度入学試験問題（前期日程）

国 語

（教育学部）

—— 解答上の注意事項 ——

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子1冊と解答紙2枚がある。
- 3 問題は3問ある。（すべての問題に解答すること。）
- 4 問題の解答は、解答紙の所定の解答欄に記入すること。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

○前期日程  
○科目名

国語

令和4年度入学試験  
問題訂正

正	誤	訂正箇所
(1) 「なれにし雲のうへ」とは・・・	(1) 「なれにし雲の上」とは・・・	10 ページ 問四

正	誤	訂正箇所
とは・・・	(1) 「その非―現実のイメージ」が「理想」から「虚構」へ、そして「不可能性」へと変遷していった」とは・・・	7 ページ 問四
(1) 「理想」から「虚構」へ、そして「不可能性」へと変遷していった		

一次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、いずれも二〇二〇年九月に刊行された書籍『コロナ後の世界』に収められた文章の一部である。これらの文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、原文を一部改めたところがある。)(50点)

### 【文章Ⅰ】

これまで、新型ウイルスなどの自然物の「不可知性」と、新型AIなどの人工物の「不可知性」を、別々の文脈で確認してきた。しかしそれらはすべて、「人間社会の近代化」によって、人類全体に脅威を与えうようになった、人類にとって不可知でありうる存在」という点では共通している。この共通点を概念化したものが、本稿の冒頭で登場した〈不可知性〉である。では〈不可知性〉とは、より詳細にはどのようなように定義できるだろうか。

そこではまず、〈不可知性〉に最も近い概念として、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックが「リスク社会」で定義した「リスク」という概念を紹介し、その「リスク」との比較によって〈不可知性〉の定義をより明確化してみたい。

ベックの「リスク」概念は、「近代化(科学技術発展)以前から存在していようといまいと、近代化の結果として、空間的・時間的に無境界・無限定に広まる可能性を得て、その広まりによって人類全体に脅威を与えうる、五感では直接知覚できないもの」として定義できる。そしてその典型例として、ベックは「放射性物質(のもつ放射能)」などを挙げている。

この「リスク」の定義は、新型ウイルスや新型AIを典型例とする〈不可知性〉にも、そのまま当てはまる。しかし、〈不可知性〉の脅威を説明するには、この定義だけでは不十分だ。

「リスク」の典型例である放射性物質は、たしかに人間の五感では直接に知覚できない。しかし、放射線測定器を用いれば、容易に検出でき、存在を知ることができる。また、放射性物質の性質(放射能)は、生物やウイルスのように突然変異するものではないので、科学的研究によって説明していくことができる。

それに対して、〈不可知性〉の典型例である新型ウイルスは、潜伏期が長く無症状率が高いため五感では必ずしも知覚できないだけでなく、医学的な検査によっても100%正確にはその存在を検出できない。また、突然変異によって遺伝情報が大きく変異した場合には、不可知なる新たな性質を得るとともに、検査の検出力も落ちてしまう。

また、〈不可知性〉のもう一つの典型例である新型AIも、それが学習した特徴量(によって規定される機能)は、そもそも設計者にとってすら理解することが実質的に不可能だし、新たなデータの学習をしまえば、さらに不可知なる新たな特徴量(機能)を得てしまう。

そういう意味で、新型ウイルスや新型AIのほうが、物理化学的な性質が分かっている検出も容易な放射性物質よりも、人類にとって格段に不可知性が

高いのである。

したがって、「リスク」という概念の定義に、次の条件、つまり、「(たとえば突然変異や特徴量学習などによって生まれる)人類にとって未知の変種が、つねに生まれる可能性があり、かつ、その変種が人間の知りえないところで広まる可能性が常にある」という条件を追加すれば、「不可知性」という概念になる。つまり、「リスク」(近代化によって人類全体への脅威となる可能性を得た、知覚できないもの)のうち、「その性質あるいは存在有無が、どの人間にとっても不可知な可能性がある」ものが、「不可知性」なのである。

これまでの人間社会は、近代化のプロセス(世界を可知化するプロセス)のなかで、自然を支配し(可知化し)、ウイルスや細菌などの自然物による脅威を克服し、科学技術を発展させることで、物質的に豊かになってきた。また、近代化が生み出した人工物は、原子力発電技術を含め、人間が設計したもの(完全に可知なるもの)であり、その挙動をコントロールすることが(少なくとも理論上は)可能であるとみなされてきた。

そのため、近代化が進めば進むほど、「人間社会を攪乱する要因は、十分に可知化されてきた自然物や、もともと可知な人工物ではなく、いまだに不可知性を孕んでいる人間(他者)なのだ」とみなされるようになり、「人間の連帯」がめざされてきた。

とくに第二次世界大戦後は、多くの国々で大規模な工業化と高度経済成長が起こり、近代化が急速に進んだ。するとそれらの国々では、「人間の連帯をめざす」という上述の近代的な規範が普及していった。またそれと同時に、流動的な近代社会のとらえどころのない「現実」を、なんとか意味づけて秩序づけるために、人々は、「現実」と対比的な「非—現実」のイメージ(社会的構築物)を広く共有するようになった。<sup>\*</sup>そしてその「非—現実」のイメージは、「人間の連帯をめざす」という近代的規範を前提としつつ、「理想」(1945〜70年頃)から「虚構」(1970〜95年頃)へ、そして「不可能性」(1995年頃)へと変遷していった。

「理想の時代」(1945〜70年頃)は、人間全体の連帯を「実現可能な理想」として想定できた時代である。象徴的な出来事は、戦争を防ぐための、国際連合の設立(1945年)だ。

「虚構の時代」(1970〜95年頃)は、人間全体の連帯を「実現不可能な虚構」として共有できた時代である。象徴的な出来事は、先進諸国の人々を魅了する虚構としてのアニメーション作品を最も多く生み出したウォルト・ディズニーの理想を具現すべく世界中に設置された「ディズニーランド」のなかで、とくに世界平和を具現化した「It's a Small World」の設置(1966年)である。実際には戦争は頻発していたが、少なくともディズニーランドを開園できるような「国内の平和」が保たれていれば、「It's a Small World」の館内では、まるで「世界平和」が実現しているかのような虚構を楽しむことができた。

「不可能性の時代」(1995年頃)は、人間の連帯について、いかなる虚構も共有できず、その不可能性しか共有できなくなった(と人々が考えるよ

うになった)時代である。象徴的な出来事としては、「東京地下鉄サリン事件」(1995年)や「\*コロンバイン高校銃乱射事件」(1999年)、「アメリカ同時多発テロ事件」(2001年)などが挙げられる。「国内に(人間によって引き起こされる)テロや分断が潜在するので、『国内の平和』さえ不可能である」ことが、共通の認識となった。その共通認識を前提に、「テロの予防」や「分断の軽減」が目指された。

しかし2020年ごろから、人間社会は、人間ではなく人間以外の存在によってこそ、大きく攪乱されるようになった。その人間以外の存在というのが、人間社会の近代化によって人類全体に脅威を与えようになった、新型ウイルスや新型AIなどの(不可知性)である。このような状況になった社会、つまり、人間と(不可知性)によって構成される社会が、本稿の冒頭で述べた「(不可知性)の社会」なのである。

「(不可知性)の社会」は、人間(の構成する人間社会)と(不可知性)とから構成されている。(不可知性)の社会において、人間社会を攪乱しうるのは、もはや人間だけではない。人間は、人間社会のうち、自分の力が及ぶ範囲のみを部分的に攪乱しうる。それに対して(不可知性)は、空間的・時間的に無境界・無限定に広まり、しかも人類には不可知な部分を含み制御不能なので、人間社会の全体を攪乱しうる。

この2020年に始まった(ように私たちには感じられているが実は新型AIが生まれた2006年からすでに潜在的に始まっていた)「(不可知性)の社会」では、人間社会は——たとえその内部で人間が連帯できてもできなくても——、人間以前の存在(新型ウイルス)や人間以後の存在(新型AI)の(不可知性)によって、その全体を攪乱されうる。つまり「(不可知性)の社会」では、(不可知性)との共存をめざすことが、人間社会にとって不可欠になるのだ。

(柴田悠「(不可知性)の社会」による)

注 新型AI……ここでは、AI(人工知能)のうち、2006年に発明された深層学習(ディープ・ラーニング)型のAIを指す。

そしてその典型例として、……原文の注に「放射性物質は、近代化以前から自然界に存在するが、近代の科学技術によってその性質(放射能)が強まりうることにより、それによって人類全体の脅威となりうる」とある。

そしてその「非—現実」のイメージは、……原文の注に「大澤真幸『不可能性の時代』(岩波書店、2008年)」とある。

コロンバイン高校銃乱射事件……アメリカで起きた学校内銃乱射事件。

## 【文章Ⅱ】

われわれは今、終わりなき終わりの時代を生きている。

新型コロナウイルスの急速な蔓延まんを通して、人類は一瞬、終わりを見た——あるいは見つめる。終わりはこんなふうにはやってくるのではないかと、と。世界の終わり、人類自身の終わり、あるいは資本主義の終わりは……。

現在、われわれの最も切実な問いは、こうであろう。この状況はいつ終わるのか？ 終わりと隣接しているこのような状況は、いつ終わりを迎えるのか？ この問いに対する最も誠実な答えは、「これは終わらないだろう」である。

まず、この新型コロナウイルスに限っても、小康的な時間を挟みつつ、第二波、第三波の感染の流行が襲ってくるだろう。さらに、新しいウイルスは、現在の新型コロナウイルスで終わるわけではない。第二、第三のウイルスが人間社会に侵入してくる可能性が高いと考えなくてはならない。というのも、現代社会は——グローバル化した資本主義社会は——、新しいウイルスに対して二つの意味で脆弱ぜいだからだ。第一には、開発が進み、人間が住む世界が野生動物の世界に接近し、両者の間のカンショウ地帯アが著しく小さくなったこと。第二に、人間の移動が頻繁になり、ウイルスの感染の速度が著しく大きいこと。このように推論を拡張していくと、ひとつのことに気づく。現在のコロナ禍は、人新世に固有な現象の一部と解すべきだということに、である。

人新世とは、地球の生態系の基本的な性格を規定するほど、人類の活動の影響力が大きくなった時代を指すのに、専門家たちが使っている用語である。いつから人新世であったのかは個々の専門家によって見解が分かれる。たとえば産業革命以降とする者もあれば、二〇世紀末期以降とする者もあり、さらには農業を始めてからとする者さえもいる。人新世がいつからかはここでは重要ではないが、われわれはこの概念が説得力をもつ時代、この概念の意味を実感できる時代を生きていることは間違いない。人新世には次のような逆説がある。

人新世とは、自然が人間と相関的であるということが、認知的な意味だけではなく、ソクブツイ的な意味をもつようになった、ということである。つまり人間は、十分に強力になり、自らの生の基本的な条件となるような自然にまで影響を与えるようになったのだ。いまや、人間や社会にとって完全に外的な環境としての自然なるものは終わった（自然の終焉えん）。このとき逆に、人間は、自らが、地球という小さな天体の環境条件を究極的には受け入れるほかない一つの動物種であることを自覚させられることになる。つまり人間は、自然を征服したときに、逆に、自然に規定された弱い動物種であることを自覚した。というのも、自らの活動によってもたらした自然の変化を、人間は制御することができず、以前より一層大きな——あるいは以前にはなかったような——大きな損害を被ることになるからだ。地球の温暖化も、海面の上昇も、そして超大型の台風等の異常気象も、すべてそうした現象に含まれる。

そして、グローバル資本主義の野生領域への侵入が、人類のウイルスへの脆弱性の原因になっているとすれば、新型ウイルスの感染症の拡大もまた、人新世の逆説のとりわけセンエイクな現れのひとつと見ることができると、そうだとすると、「この状況はいつ終わるのか？」という質問はナンセンスだ。「この

状況」が、この目下のウイルス禍を一部に含む人新世的な社会変動の全体だとするならば、そして、「終わる」ということがこのウイルス禍が起きる前の世界への復帰を意味しているのだとすれば、「この状況」が「終わる」ということははやらないからだ。仮に、現在の新型コロナウイルスの脅威は、たとえばワクチンや治療薬の発明などによって取り除かれたとしても、人新世に規定された危機がつねに潜在している。

だから、われわれは終わりなき終わりの時代を生きることになる。こう主張するとき私は、<sup>\*</sup>宮台真司が四半世紀前の地下鉄サリン事件の後、オウム真理教の信者とそのシンパに対して言ったスローガン、「終わりなき日常を生きる」が念頭にある。オウム信者は、終わりの幻想に魅了されていた。それに対して、宮台は、華々しい終わりなどはやってこない、終わりなき日常を生きるべきだ、と説いたのだ。かつては、終わりというものは一瞬のうちに到来するものであり、日常は終わりが無いのが当然だった。だが、今後、われわれが生きていくのは、「終わり（に隣接する時間）」が終わらない、という状況である。つまり日常こそが「終わり」の時間だという状況である。すると、現在さかんに唱えられている「新しい日常」という語は、不吉な響きを<sup>E</sup>トモナつて、いることに気づく。それは、終わりなき終わりの言い換えではないか、と。

「この状況がいつ終わるのか？」と問うとき、人は、まだその「終わりなき終わり」を否認し続けている。この運命を受け入れてはいないのだ。それも当然であろう。この「終わり」が終わらないのだとすれば、まったく希望がない、と言っているに等しいのだから。希望をもつためには、この終わりがいつか終わると想定しないわけにはいかない。

だが、そうだろうか。終わりなき終わりを直視することは、希望をもてない、ということなのか。そうではない。あえて誤解を恐れずにいえば、ほんとうの希望をもつためには、むしろいったん絶望しなくてはならない。終わりをいったんはつきりと認めなくてはならない。逆説的な言い方になるが、<sup>C</sup>真正の終わりを乗り越え、さらなる希望をもつ唯一の方法は、終わりの不可避性を受け入れることである。

そのように考える根拠は、<sup>\*</sup>エリザベス・キューブラー・ロスが『死の瞬間』で述べていることである。この本によると、末期癌<sup>が</sup>など死が確実な病を得ていることを告知された患者は、最終的に死の事実を受け入れ、覚悟を決めるまでに五つの精神のステージを歩む。最初、患者は、事実を単純に拒否し、「否認」する（「そんなことが私の身に起こるはずがない」）。その後、「怒り」の段階（「どうして私がこんな目に合わなくてはならないんだ」）等を経て、最後の第五段階において、人は、死を真に「受容」する。キューブラー・ロスによると、死だけではなく、人生におけるさまざまな不幸や破局に対する態度においても——たとえば失業や破産や失恋などに關しても——、人は同じステップを歩む。

ここで重要なのは、第五段階の死の「受容」である。このとき人は、単純に希望を失い、不活性になるわけではない。そのような状態は、一つ前の第四段階、「抑鬱」と名付けられた段階においてやってくる。第五段階では、人は、むしろ死の運命に対して前向きである。来べき死に対して準備をするようになるのは、この段階に達したときだ。要するに、この段階に至ってはじめて人は、死という破局に対して、それまでよりも高い精神的な境地に到達す

るのである。

同じことは、現在のコロナ禍にも言えるのではないか。この危機を乗り越えるためには——人新世というコンテキストの中でこの危機を乗り越えるためには——、われわれは、生活様式も社会構造も、そして(社会的に容認されている)テクノロジーに関しても、これまでの価値観や想定を否定するような、根本的な変更を必要とする。つまり、これまでの価値観を相対化するような精神的な境地に立つ必要がある。それをなしうるのは、キューブラー・ロスのいう第五の段階に達したときのみである。つまり、破局(終わりなき終わり)を不可避の運命として、いったんは完全に受け入れる必要がある。

キューブラー・ロスの図式を適用したとき、実際のわれわれは今、どのステージにいるのか。「否認」「怒り」に続く第三のステージ、ちょうど真ん中の段階にあたる「取引」が、われわれの現状である。これは、運命との取引によって、破局(死)の意味を小さくしたり、破局を延期できないか無駄にあがく段階である。現在、われわれは、在宅勤務の比率を増やすとか、できるだけマスクをつけるとか、食事中のおしゃべりを減らすとかといった程度の犠牲で手を打ってくれないか、と運命と交渉している最中だ。しかし、この程度のことでは運命は譲歩してはくれないだろう。なぜならば、問題は、このウイルスだけではないからだ。

(大澤真幸「もうひとつ別の経済へ」による)

注 宮台真司……社会学者。

シンパ……支持者。シンパサイザー(sympathizer)の略。

エリザベス・キューブラー・ロス……アメリカの精神科医。



問一 二重傍線部ア、エのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 【文章Ⅰ】は意味の上から二つの部分に分けることができる。後半部のはじめの十字を抜き出しなさい。

問三 傍線部Aについて、「リスク」と〈不可知性〉の(1)共通点と(2)相違点をそれぞれ簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部Bについて、次の(1)(2)に応えなさい。

(1) 「その非―現実のイメージ」が「理想」から「虚構」へ、そして「不可能性」へと変遷していった」とはどのようなことか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

(2) 筆者がそのような変遷を取り上げているのはなぜか。【文章Ⅰ】の趣旨を踏まえて答えなさい。

問五 傍線部Cについて、「終わりの不可避性を受け入れる」とはどういうことか。「人新世」という語句を含めて七十字以上九十字以内で説明しなさい。

問六 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、ともにコロナ後の世界における人間の生き方を論じているが、論述の視点には違いがみられる。どのような違いがみられるか、次の条件①～③を踏まえて分かりやすく記述しなさい。

条件① おのおのがどのような視点に立ち、何を主張しているのかを明確にすること。

条件② おのおのの視点を対比させ、その違いが明確になるように書くこと。

条件③ 次の語群から一つ以上を適切に使うこと。

〔語群〕 空間、社会、自然、グローバル化、希望、精神

二 次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。仕えていた堀河天皇が崩御した後に鳥羽天皇に仕えている作者が、折りに触れて先帝(堀河天皇)を追慕することが描かれている。文章を読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文の表記を改変した箇所がある。)(30点)

かくて、御遊みあそびびはてかたになりぬれば、殿との、御琴おんこと、治部卿ちぶのきやう基綱もとつな、琵琶びば、拍子ちやくし、もとのごとく宗忠むねただの中納言ちゆうなごん、笙しやうの笛ふえ、内の大臣うちのおおみの御子みこの少将せうしやう雅定みやまだ、笛ふえ、筆ひしりき、もとの人々ひとびと御みつがひにて、殿とのの御声みこゑにて、「万歳ばんざい楽がく、いだせ」とて、われうちそへさせたまひて、ふたかへりばかりにて、安名尊あななかと・伊勢いせの海うみなど、みだれあそばせたまふ。宗忠むねただの中納言ちゆうなごん、拍子ちやくしとりていだし。

ことはてぬれば、おのおの装束しやうそくぬぎかへさせたまふ。殿とのの御琴おんことのね、つまおとなべてならず、めでたし。みな人々ひとびと、禄肩ろくかたにかけてたつに、殿とのは、人にはいまひときはましまゐらせて、御下襲みしたかぎね・うち御みぞ、肩かたにいたさせたまひたるを見まゐらすれば、三笠みやがさの山やまにさしいづるもち月の、世々よよをへてすみのぼらんやうに、見ゆ。御みとしのほどなど、まことに、さかりなる桜さくらの花はなの咲さきととのほりたらんを見るこちす。御みよそほひ、転輪てんりん聖王しやうわうかくや、とおほえさせたまふ。たたせたまふとて、「たまはりたるものなり。置おきてたつべからず。なめげなり」とて、御肩みかたにかけながらおはしまして、大床子おほしやうじのまへにて、御子みこの中將ちゆうしやう殿とのを、「参まゐれ。これたまはれ」とて、ゆづりまゐらせたまふ、見まゐらすれば、二葉ふたはの松まつの千代ちよに栄さかえいでん御みゆくさき、雲くもをわけてなりのぼらせたまはんほど、たのもしく見えたり。

ことはてぬれば、車をたてて、やがてまかぬ。

またの日ひ、夜よべのなごり、めづらしく心こゝろにかかりておほゆるにも、まづ、昔むかしの御みなごり、思おもひいでられさせたまへば、周防すおうの内侍うちわらひのもとへ、代々よゝゝおほえて、げにと思おもひあはせらるらんとて、いひやる。

C めづらしき豊とよのあかりの日ひかげにもなれにし雲くものうへぞこひしきかへし、

思おもひやる豊とよのあかりのくまなきによそなる人のそでぞそほつる

\* つごもりになりぬれば、ついたちの御みまかなひすべきよし、おほせられたれば、いそぎあひたるにも、われはただ、「わかれやいと」とのみ、おほえて。

つごもりの夜よ、うちへ参まゐるとて、堀川院ほりがわいん過あぐるに、二条ふたじょうの大路おほぢやう・堀河ほりがわなど、かかいすみ、ものさわがしげに人のいでりたるけしき、見えみえず。目めのみまづとどまりて、

E ぬしなしとこたふる人もなければも宿しゆくのけしきぞいふにまされる

とよみけんふるごとさへ、思おもひいでらる。

注 御遊び……御神楽の後に行われる演奏。

殿……摂政殿。藤原忠実。

万歳楽……雅楽の舞楽・管絃の曲名。

安名尊・伊勢の海……雅楽の曲名。

祿……褒美として与えられる物。

御下襲・うち御ぞ……束帯の時に下に着る衣服と、大きく仕立てた袷。

転輪聖王……世界を統治する理想的な帝王。

大床子……寄りかかりのない椅子。

中将殿……摂政殿の息子の藤原忠通。一三歳。

昔の御なごり……今は亡き堀河天皇の御代のこと。

周防の内侍……作者とともに堀河天皇に仕えていた女房の名。

豊のあかり……豊明の節会。五節の舞がある。

日かげ……五節の舞を踊る女性が髪に飾る「日蔭の鬘かづ」のこと。

「日影」を懸けて「輝かしい行事」の意味も表す。

つごもり……ここでは十二月の月末。

かいすみ……ひっそりと静まりかえって。

ふるごと……古歌。

問一 二重傍線部 a c 「ぞ」の結びの部分抜き出し、品詞名を答えなさい。

問二 傍線部 A 「われうちそへさせたまひて」とは、誰がどういう行動を取ったことを表しているか、説明しなさい。

問三 傍線部 B 「二葉の松の千代に栄えいでん御ゆくさき、雲をわけてなりのぼらせたまはんほど」は誰のどのような様子か、説明しなさい。

問四 C の歌について次の問いに答えなさい。

(1) 「なれにし雲の上」とは何を指すか、説明しなさい。

(2) この歌を「周防の内侍」のもとへ送ったのはなぜか、説明しなさい。

問五 傍線部 D 「わかれやいとど」は紀貫之の歌「恋ふる間に年の暮れなばなき人の別れやいとど遠くなりなむ」の一節であるが、作者はなぜこの歌が思い出されたのか、説明しなさい。

問六 E 「ぬしなしと」の古歌を、作者はどのような気持ちで引用したのか、古歌の内容を踏まえて説明しなさい。

三 次に挙げる南宋・陸游の詩を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、送り仮名を省略したところがある。)(20点)

「睡起作帖数行」

睡余得清風  
起坐傍書几

日長誰語言  
頼此管城子

欣然共游戲  
一笑我忘爾

群鴻偶下集  
但怪驚不起

古來翰墨事  
著意更可鄙

跌宕三十年  
一日造此理

不知筆在手  
而況字落紙

三叫投紗巾  
作歌識吾喜

(「劍南詩稿」による)

注 作帖……書の内容を作ること。

睡余……眠りから覚めたあと。

書几……ふみづくえ。

管城子……筆の異名。筆を擬人化した言い方。

游戲……「遊戯」に同じ。

群鴻……たくさんのおおとり。ここでは作者が紙に書

いた草書体の字のたとえ。

驚……おおとりが驚いて飛び立とうとしているさまを

いう。

翰墨事……筆と墨のこと、またそれらを用いて書くこ

と。

著意……意を注ぐこと。ここでは、なにかしらの作為

やたくらみを持って書くことをいう。

更……まったく、かならず。強調の副詞。

跌宕三十年……これまでの三十年間、ただ気ままに書

いてきたことをいう。

紗巾……うすぎぬの頭巾。

問一 傍線部①②③の文中における読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記しなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問二 傍線部Aは、「群鴻」の様子について述べたものである。「群鴻」が「驚不起」であったのはなぜか、わかりやすく答えなさい。

問三 傍線部B「此理」は、どういうことを指しているか、説明しなさい。

問四 傍線部C「況字落紙」を書き下し文に改めなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問五 傍線部Dに「吾喜」とあるが、この詩において述べられている喜びとはどのようなものか、具体的に答えなさい。